

それは事実だった。教週間前までは、ほとんど教時間おきに隣室から聞こえてきていた赤ん坊の泣き声が、ここしばらくそう頻繁には聞こえなくなっていたのだ。

四六時中注意を払っているわけではないが、赤ん坊の泣く回数が減ったということは母親が暴れ出す回数も減ったということで、それにしてはサキは行雄の部屋に入り浸っているが、まあ全体的には良い方向に向かっているのではないかと行雄はなんとなく考えていたのだ。

返答がないのでサキの顔をふたたび見やると、サキはうつむいて小さな唇を噛みしめていた。行雄は急に不安になった。

——約束だよ。

サキは口を閉ざしたままだったが、この前サキの言ったひと言がなぜか急に耳もど聞こえ、行雄は腰を浮かしかけた。

そのとき隣室から、女の歩く足音がした。不機嫌そうな、わざと足音を大きくしているみたいな歩き方だった。それと同時に、アキが激しく泣き出したのも判った。

行雄は浮かしかけた腰を戻し、サキを見る。

「サキは、どうしてここに来るんだ？」

面と向かってそう訊くのははじめてだった。サキはぼかん、とした表情で行雄の顔を見返した。そんなことも判らないのか、と言われたような気がして、来るなど言っているわ

けではないのだと慌てて付け足そうとしたときにサキは口を開いた。

「だって……、いちばん近いもん」

五歳の子どもにしてみればもつとも正直な答え方かも知れなかった。一階、二階にそれぞれ三世帯ずつのこのアパートだが、一階の右端だけ空き部屋になっているので、真ん中の部屋であるサキの住まいにとつて、「お隣り」は左奥の行雄の部屋だけなのだ。

もしサキがもう少し大きければ、少なくとも十二、三歳であつたら、行雄の部屋になど避難せずに歩いて五分ほどの大家夫婦の家へ走るくらいの知恵はまわつただらう。その前に、唯一の「お隣り」である行雄が田舎での問題から逃げ出して出奔し、人目を避けて隠れるように暮らしている人間でなかったら——。

さまざまなことが頭の中をぐるぐる廻りかけたとき、サキがふたたび口を開いた。

「それに……」

弾かれたようにサキのほろを見て、続きを促す。

「それに？」

するとサキは少しためらう感しで下を向いたが、やがて下を向いたままで言った。

「それに、おにいちゃん寂しそりだったから……」

二の句も継げずに一瞬黙った。だが、五歳の子どもからそんなことを言われた驚愕と自嘲と羞恥のあとに訪れたのは、とてつもない可笑しさだった。